インド哲学仏教学研究　8，　2001．3

ヴィヴァラナ派における māyā，avidyā，ajñāna
—実在の三階層との関連から—

加藤　隆宏

I. はじめに

ヴェーダーンタ学派の不二一元論派では，ブラフマンのみが唯一の実在であり，それ以外の多様な世界は虚妄な現れであるとされ，その世界のどこかに何らかの誤りがあることに気づくことによって，ブラフマン＝アートマンという本来の姿に返ることができるとする．ブラフマン＝アートマンという知をもってそのような虚妄な世界を脱するために，まず我々は現実に眼の前にある世界がどこから現れたものか，またこれらの世界は何を原因としてどのように構成されているのかを見極めなければならない．例えば，不二一元論派の入門書として位置付けられている *Pañcadaśī*（＝PD, 1350 頃[1]）は，ブラフマン以外の世界を主宰神と個我とによって創られたものとし，その多元な世界を考察する章（Dvaitavivekaprakaraṇa）の冒頭において，この主宰神と個我とによって創られた多元的な世界をよく考察することで，我々が捨て去るべき障碍を明らかにしようと述べている[2]．PD によれば，唯一なるブラフマン以外の虚妄な世界は主宰神と個我とによってもたらされ，主宰神，個我という別異をもたらす素となっているのが māyā と avidyā とであるという．これら māyā と avidyā には，それぞれ真実を覆い隠したり，非真実なるものを現し出す力がそなわっており，これらを原因として誤って現れ出たものが我々によって捨てられれば，そこには真実なるブラフマンのみが残るという．PD は māyā と avidyā とを別立てし，ブラフマン，māyā と結びついたブラフマン，avidyā と結びついたブラフマンという三種のあり方を明確に区別しており，このことから同書においては，個我によって捨て去られるべき虚妄な世界が階層的に捉えられていることが確認できる[3]．

本稿では，以上述べたようにブラフマン以外の虚妄な世界を考察し，よく見極めることによってブラフマン＝アートマンという真実に近づこうとする不二一元論派のうち，PD とほぼ同時代に属し，PD の作者と同じ人物の手によるものとも言われる *Vivaraṇaprameyasaṃgraha*（＝VPS, 1350 頃）を足がかりとして[4]，不二一元論派においてバーマティー派と並んで大きな勢力を誇ったとされるヴィヴァラナ派[5] の祖 Prakāśātman の *Pañcapādikāvivaraṇa*（＝PPV, 1200 頃）が，ブラフマンと世界との関係をどのように捉え，ブラフマン以外の捨てられるべき虚妄な世界をいかに想定するかを見ていくことにする．その際に注目するのは虚妄な世界をもたらす ajñāna，māyā，avidyā という原理である．これらは，真実であり唯一であるブラフマンと虚妄で多様な世界とがどうして両立しうるのかという難題に対する一応の解答であり，シャンカラを始めとする不二一元論派は，māyā あるいは avidyā などといった原理によって，不二一元という原則から逸脱せずに一

と多とを両立しうると考えている．このような原理として登場するのが ajñāna，māyā，avidyā などで，これらのうちのどれを好んで用いるか，これらを同一と見なすか否かなど，原理の扱い方は同じ不二一元論派であっても時代，学匠ごとに一様ではない．またこの問題を扱う諸研究においてその見解に一致を見ないこともある[6]．そこで，特にこれらが同一か否かという点に注目しつつ本論考を進めていきたい．

II. 実在の階層

Hacker［1952］は，不二一元論派において実在という際には，そこに或る階層が認められるとして，この実在の階層を以下のように三つの系列（Reihe）に分類している[7]．

1 : satya—asatya（二層）

2 : sat—asat—sadasat—anirvacanīya—pañcamaprakāra（五層）

3 : paramārthasat—vyāvahārikasat—prātibhāsikasat（三層）

これら三つの系列に共通するのは，ブラフマンという唯一で真実なる実在に対応する階層とそれ以外の階層で構成されている点である．実在に二層を考える系列 1 の場合，satya という階層は最高実在ブラフマンに対応し，asatya という階層は，ブラフマン以外のものに対応する．Hacker［1952］によればここでいう sat と satya とは同じ内容を示すが，asat と asatya とは明確に区別される．asat が単に存在しないものに対応している一方で，asatya とは実在はするが真実なるものとしては実在しないもの，あるいは誤って現れ出ているものに対応するという[8]．系列 2 と 3 ではそれぞれ sat, paramārthasat がブラフマンに対応し，その他の層によってブラフマン以外の虚妄な世界が様々に階層づけられる．Hacker［1952］はこの三系列を紹介し，これらのうち特に *Iṣṭasiddhi*（Vimuktātman, 10c.頃）における系列 2 の分析を試みている．

本論では特に satya—asatya という二層の実在からなる系列 1 と実在に paramārthasat—vyāvahārikasat—prātibhāsikasat という三層を設ける系列 3 との関係に注目する．3 は 1 における asatya という階層にさらに二層を想定するものであるという Hacker［1952］の指摘[9]を参考にすれば，1 と 3 との違いはブラフマン以外の虚妄な世界に二つの層を認めるか否か，さらに言えば，虚妄な世界に二つの層をもたらすような原理を認めるか否かにあると考えられる．先にも挙げた PD を再び例に取れば，同書では虚妄なる世界において二つの階層をもたらす māyā と avidyā という原因が明確に区別されていることから，実在に三層あるいは，それ以上の層を想定していることが予想される．以上をふまえて PPV や VPS によって代表されるヴィヴァラナ派が実在に何層を認めるのか，またその層をもたらす原因となる māyā，avidyā，ajñāna などについてどのように考えるかを見てみることにする．

III. 実在の三層

これについて，まずヴィヴァラナ派を確立したと言われる PPV の記述を見てみること

にしよう．同書には実在に三層を認める次のような記述がある．

PPV：実在性は三種である．ブラフマンには究極的な実在性があり，虚空などには māyā を制約とし，有効な作用の可能性をもつ実在性があり，銀などには avidyā を制約とする実在性がある[10]．

PPV においては vyāvahārikasat，prātibhāsikasat という術語は用いられず，māyā と avidyā という制約の差違によって三層が得られ，それぞれの層にはブラフマン，虚空など，銀などといった対応が挙げられている．

この PPV に従う VPS も同様に，実在に三つの層を想定する．

VPS：それならば，三種の実在性があってもよい．ブラフマンには究極的な実在性（pāramārthikaṃ sattvam），虚空などには māyā を制約（upādhi）とする日常的な実在性（vyāvahārikaṃ sattvam），貝殻における銀などには avidyā を制約とする擬似的な実在性（prātibhāsikaṃ sattvam）がある．これらのうち究極的な実在性以外の二つの実在性［日常的な実在性と擬似的な実在性］が虚妄であるということは矛盾ではない[11]．

PPV，VPS はまず，究極的な実在性をもつものとそれ以外という二層を想定し，さらに先に見た系列 1 における asatya に相当する階層において日常的な実在性を有するものと擬似的な実在性を有するものとの二層を認め，あわせて三層の実在を想定する[12]．

PPV

paramārthasattva	ブラフマン	三層
māyopādhika-arthakriyāsāmarthyasattva	虚空など	
avidyopādhikasattva	銀など	

VPS[13]

pāramārthika-sattva	ブラフマン	三層[14]
māyopādhika-vyavahārika-sattva	虚空など	
avidyopādhika-prātibhāsika-sattva	銀など	

このように究極的な実在性をもつブラフマン以外のものに二層を認め実在に三層を想定すると言うことは，すなわちこの二層をもたらす何らかの原理を認めていると考えてよいだろう．この場合，その原理とは，「māyā を制約とする」「avidyā を制約とする」という言葉によって示されるように，本来純粋なるブラフマンにとっての制約となる māyā と avidyā とである．PPV と VPS の場合，māyā と avidyā という二つの異なる原理を前提に，三層からなる世界を想定しているということになる[15]．

しかしヴィヴァラナ派では，māyā と avidyā とを区別しないという伝統が守られており[16]，ヴィヴァラナ派として位置付けられる PP，PPV，またその綱要書として位置付けられる

VPSにおいてもこの二つの原理は区別されないはずである．実際にPPにはmāyāとavidyāなどを同義語とする一節を見いだすこともできる．ここでこの二層の別異をもたらすものがmāyāという制約であり，あるいはavidyāという制約であると語るのならば，PPV，VPSはmāyāとavidyāとを区別していることになる．そこでPPV，VPSは続く前主張者の問いとそれに対する答えという形式で次のように述べている．

PPV：あるものたちは述べる．（問い）それゆえ，［銀は］avidyāからなるものであると述べられるべきで，māyāからなるものであると述べられるべきはない．諸々の誤った知は，真実の知によって否定されるものであるので，avidyāを本体とするものであるから．またmāyāとavidyāとは異なるものであるから．例えば，māyāは自らの拠り所を惑わせることなく，行為者の欲求に従うものであるであるが，avidyāはそうではない．また，māyāとavidyāとが異なることは，世間的によく知られている．実際，māyāによって創り出された象や馬や戦車などに対してavidyāという語が用いられることはない[17]．

VPS：（問い）真実の知によって除かれるものであるから，銀はavidyāからなるものであって，māyāからなるものではない．また，māyāはavidyāではない．定義と慣用とによって，その両者の別異を理解するから．拠り所を惑わせることなく，行為者の欲求に従うものがmāyāである．そして，その逆がavidyāである．世間において，māyāによって創り出された象や馬や戦車などに対してはmāyaという語こそが［用いられ］，avidyāという語は［用いられ］ないことがよく知られている[18]．

前主張者は，両者に別異を認める定義と慣用とを根拠にmāyāとavidyāとは別であると主張する．それに対してPPV，VPSは，māyāとavidyāの両者には，言い表され得ないもの（anirvacanīya）であり，真実の現れを妨げるものであること（tattvāvabhāsapratibandha）と非真実の現れであること（viparyayāvabhāsa）という定義が等しく当てはまることを理由に，両者に区別が無いことを述べる[19]．さらにmāyāはその拠り所を惑わせることなく，avidyāはその拠り所を惑わせるという性質の差違にもとづいて両者は異なると述べる前主張者に対して，行為者の欲求に従わないmāyāと拠り所を惑わせることのないavidyāとを例にその主張を否定する[20]．māyāとavidyāとを区別しないということは，PPVとVPSが，先に見られた系列3のように三層を想定するのではなく，系列1のように二層を想定すれば足りるとする立場にあることを意味する（下図左）．一方で三種の実在性を述べておきながら，他方でブラフマン以外の実在において複数の階層やあるいはそれらの階層をもたらす原理を認めないという相容れない二つの主張が抱える困難をPPV，VPSはそれぞれ次のように述べて解消する．

PPV：それゆえ，定義は同一であるから，また年長者の用法においても［両者が］同一であることが理解されるから，ある一つのものに対して展現を主とするものとしてmāyā，覆蔽を主とするものとしてavidyāというように慣用表現される．あるいは，

欲求に従う従わないという点で慣用が異なる．ということで［銀は］māyā からなるものであるというのは正しい[21]．

VPS：以上の聖典において， māyā と avidyā と同一であることがまさしく始めから明示されている．一方，世間的な慣用［では māyā と avidyā とが区別されているという事態］は，同一のものに対して制約が異なるという理由により，説明がつく．多様なものを生み出すものであるという側面によって，あるいは欲求に従うものであるという側面によって，māyā という慣用表現がある．覆い隠すものであるという側面によって，あるいは［行為者の欲求と離れて］自立的であるという側面によって，avidyā という表現がある．それゆえ，銀は māyā からなるものである[22]．

先に定義・慣用の点から māyā と avidyā とが同一であると答え，さらに両者を同一であるとする聖典を紹介した後に，世間における慣用という視点から両者に別異を見ることが可能であるとする（下図右）．特に慣用的な観点から PPV と VPS が認める両者の別異は，māyā が多様なものを創り出すものであり行為者の欲求に従うものであるのに対し，avidyā が覆い隠すものであり行為者の欲求に従わないというという性質の違いにもとづくものである．このように，māyā と avidyā とが同一であったり別異であったりするのは，視点の違いによるものであると両書は説明する．

実在に三層を認める場合，māyā と avidyā という制約がブラフマン以外の二層という別異をもたらすものであると考えられるが，実在に二層のみを認める場合，すなわち実在に関してブラフマンとそれ以外の一層を想定する場合，VPS はその二層をもたらすものを付託と ajñāna という理論に求めている．

究極的な視点		慣用的な視点	
二層	ブラフマン	三層	ブラフマン
	ブラフマン以外のもの		māyā という語が適用されるもの
			avidyā という語が適用されるもの

IV. asatya と ajñāna

先に見た Hacker［1952］に紹介される系列 1 では，実在に satya—asatya という二層が想定される．慣用的な視点からは実在に三層を認めるが，究極的な視点からは māyā と avidyā とを区別せず，実在に二層のみを認める PPV，VPS においては，māyā でもなく avidyā でもない ajñāna なる原理が他方で用いられる．この ajñāna を原因とする付託（adhyāsa）によってもたらされたものが，まさしくその asatya に対応する階層を構成するという．そこで ajñāna による付託と実在の二層との関連を見てみよう．以下は，PPV，VPS が付託とその原因である ajñāna について述べる箇所である．

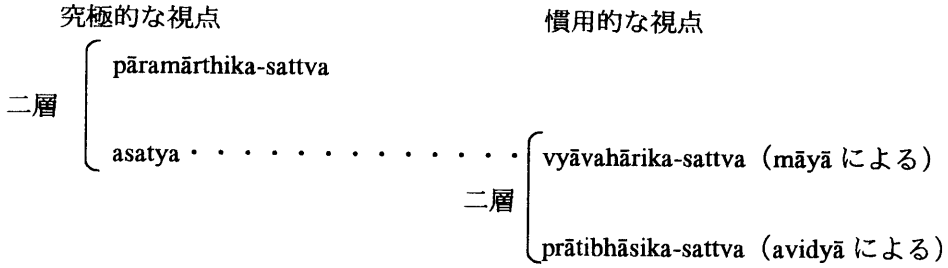
PPV：（問）どうして，この虚妄なる ajñāna が付託の質量因となるのか．（答）それ［ajñāna］がある時には付託は生じ，それがない時には［付託］は生じないから[23]．

VPS：またその付託は，始まりをもたず言い表され得ず存在というあり方（bhāvarūpa）をもつ ajñāna を質量因とする．それ［ajñāna］がある時に付託は生じ，それがない時には［付託は］生じないから[24]．

ここで PPV，VPS が付託の質量因として述べる ajñāna は始まりをもたず言い表され得ないものであり，何らかの積極的なあり方[25]をもつものであると定義される．PPV は，直接知，推理などを根拠に認識と共通の拠り所をもつ ajñāna が積極的なあり方をもつことが説明される．

ajñāna が意味するところは，jñāna が無いこと，すなわち認識が欠如している状態ではなく，あるものをそれではないものとして認識するということに他ならない[26]．先に見た Hacker［1952］が，実在はするが真実としては実在しないものに asatya という階層を対応させているのと同じように，ヴィヴァラナ派において積極的なあり方をもつと定義された ajñāna によってもたらされたものには asatya という階層がよく対応する．

以下に示した構図から，ヴィヴァラナ派はまず，ブラフマンと ajñāna によってもたらされるものという二層を認め， ajñāna によるものにさらに二層を想定して実在を三層とする．その場合には māyā と avidyā という原理が専ら用いられていることを考えれば，VPS が，実在を二層とする場合には ajñāna，実在を三層とする場合には māyā と avidyā というように用いる原理を使い分ける場合があったと考えることができる．



このように asatya という階層をもたらす ajñāna という原理によってブラフマン以外のものを想定することが可能であるとするならば，実在は二層から構成されているということになる．先に見た実在の三層のように日常的な実在と擬似的な実在という二層やそれをもたらす māyā と avidyā との別異があってもよいと PPV，VPS において認められてはいるが，この ajñāna という原理を想定するだけでブラフマン以外の非真実なる世界を説明することができる．さらに，PPV，VPS は ajñāna によってもたらされる展現（vikṣepa）と覆蔽（āvaraṇa）という側面を認めており，この二側面が māyā と avidyā に対応している可能性がある．

VPS：以上から，積極的なあり方をもつ ajñāna は，非アートマンを覆い隠さず，そこにおいて展現のみを生じさせる．他方，アートマンを覆い隠し，そこにおいて「私はこれである」「これは私のもの」といった言語表現に適合する付託を生じさせる[27]．

以上によれば，始まりをもたず言い表され得ない ajñāna がブラフマンを覆蔽し，ブラフマン以外のものにおいては展現を生じさせるというはたらきによって，世界の多様性をもたらしている．先に見られた māyā と avidyā とがもつ側面のうち，多様なものを生み出すもの（vikṣepa, virūpajanaka），覆い隠すもの（ācchādana, āvaraṇa）という側面は，ajñāna の二側面によく対応する．すなわち ajñāna には，māyā 的 ajñāna と avidyā 的 ajñāna とがあると考えられるだろう．それゆえ，PPV，VPS が ajñāna という原理を用いる場合には，satya -asatya という二層を意図するのみならず，māyā と avidyā によって得られるような二層を区別し，paramārthasat-vyāvahārikasat-prātibhāsikasat という例によって示されるような三層構造をも想定しうることを考慮に入れる必要があろう．

究極的な視点	慣用的な視点
二層 ブラフマン	
二層 ajñāna によるもの・・・・・・・・	二層 vikṣepa, virūpajanaka によるもの
	二層 ācchādana, āvaraṇa によるもの

V. まとめ

以上，実在性を二層とするか三層とするかという立場の相違を手がかりに，ヴィヴァラナ派を代表する PVV，VPS が ajñāna，māyā，avidyā という原理をどのように扱っているかを見てきた．まず PPV，VPS は実在性に三層を想定する．この際には māyā と avidyā とが別個の原理として扱われ，māyā を制約とするか，avidyā を制約とするかによってブラフマン以外の世界にも二つの層を認めることができる．本考察の対象とはしなかったが，VPS と著者を同じくすると考えられている PD を視野に入れた場合，māyā と avidyā とをはっきりと区別して用いるという点は両書の影響関係を補強しうる一根拠となろう．また，一方で PPV，VPS は積極的なあり方をもつ ajñāna という原理を用いつつ，Hacker [1952] によって示されたように実在性を二層からなるものと想定している．この ajñāna と māyā，avidyā との関係が PPV，VPS 中に明らかにされることはないが，ajñāna の二側面はすなわち多様性を生み出す側面と真実を覆い隠す側面とは，māyā と avidyā によく対応し，両書において ajñāna について説かれる際にも，māyā と avidyā との別異を認めることによって得られる三層が含意されている可能性が高いと思われる．このような実在性に関する二層

もしくは三層という立場の違いを究極的，世間的という視点の違いから生じるものであるとする PPV，VPS は，このような視点の違いによって時には ajñāna のみを認め，時には māyā 的 ajñāna と avidyā 的 ajñāna とに言及している場合があると考えられる．これについては，両書における ajñāna，māyā，avidyā という語の用法等のより一層の精査を待たねばならないが，ajñāna という場合には māyā と avidyā との両者を代表するものとして用いられるだけでなはなく，māyā あるいは avidyā のうちどちらか一方の機能をもったものとして用いられることがあることを特に注意すべきである．

実在を二層とするか三層とするかという捉え方の違いは，ブラフマン以外の虚妄な世界をすべて個人の誤りとし，これらを各個人においてのみ完結するものとするのか，あるいはブラフマンという究極の実在から見れば虚妄なものではあるが言語表現を可能にするものとしての実在を認め，各個人のみに完結しないものとするのかという立場の違いに起因する．PPV，VPS が māyā と avidyā とにもとづく実在の三層に言及し，māyā 的 ajñāna と avidyāt 的 ajñāna とを使い分ける際には，各個人のみに始終する世界とそうではない世界とが区別されていると考えられよう．

〈略号及び使用テキスト〉

PD　*Pañcadaśī of Vidyāraṇya Muṇi, with a commentary by Rāmakṛṣṇa*, edited by Wāsudev Laxmaṇ Shāstrī Paṇsīkar, 7th ed., Nirnayasagar Press, Bombay, 1949.

PP　*Pañchapādikā of Padmapāda*, edited by Rāmaśāstrī Bhāgavatāchārya, Vizianagram Sanskrit Series No. 3, Benares, 1891.

PPV　*Brahmasūtra-Śāṅkarabhāṣyam*, with nine commentaries, Vol. I-III, edited by Shri Anant Krishna Sastri, Vrajajivan Prachya Bharati Granthamala 75 (reprinted from Calcutta Sanskrit Series No.1), Chawkhamba Sanskrit Pratishthan, Delhi, 1995.

SDS　*Sarvadarśanasaṃgraha of Sāyaṇa-Mādhava edited with an original commentary in sanskrit by Vasudev Shastri Abhyankar*. Ed. by T. G. Manikar, Third Edition, Bhandarkar Oriental Research Institute, Poona, 1978.

SLS　*Siddhāntaleśa of Appayadīkṣita*, edited by Gaṅgādhara Śāstrī Mānavallī, Vizianagram Sanskrit Series No. 1, Benares, 1890.

TP　*Tattwapradīpikā (Chitsukhī) of Paramahamsa Chitsukhāchārya*, with the Commentary *Nayanaprasādinī*, edited by Pandit Kashinath Shāstrī, Chaukhamba Sanskrit Pratishthan, Delhi, 1986.

VPS　*Vivaraṇaprameyasaṃgraha of (Mādhavācārya) Vidyāraṇya*. Edited by Rāmaśāstrī Tailaṅga, (reprinted from Vizianagram Sanskrit Series No. 7), Kishore Vidya Niketan, Varanasi, 1990.

（注記）

[1] 以下，作者・成立年代についてはすべて Dasgupta［1991］に従った．

[2] PD IV.1: īśvareṇāpi jīvena sṛṣṭaṃ dvaitaṃ vivicyate /
viveke sati jīvena heyo bandhaḥ sphuṭībhavet //

[3] PD に説かれる多元的世界については，Kato［2001］参照．

[4] VPS の作者は誰であるのかという問題については，PD の作者と同一か否かという問題とも絡み合って諸説入り乱れ，確定は困難であると思われる．VPS に限定して主な説を挙げれば，その作者を Vidyāraṇya（＝Mādhavācārya）とする説（Dasgupta［1991］が採用），Bhāratītīrtha とする説（Suryanarayana［1941］が採用），Bhāratītīrtha-Vidyāraṇya（≠Mādhava-Vidyāraṇya）とする説（Mahadevan［1957］が採用）などがある．このなかでも特に Mahadevan［1957］は，VPS と PD，さらにシャンカラの作ともいわれる *Dṛgdṛśyaviveka* を Bhāratītīrtha-Vidyāraṇya（≠Mādhava-Vidyāraṇya）の手によるものという前提で Bhāratītīrtha-Vidyāraṇya の不二一元説の解明を行っている．しかし，幾つかの説，例えば顕現説と映像説に関して（Mahadevan［1957］，pp. 225-6.），あるいは個我の拠り所に関してなど VPS と PD とで見解を異にする場合が多く，両書が同一人物によるものであるという前提ははなはだ疑わしい．そこで本論では作者を特定せず，また VPS と PD とが同一の人物の手によるということを前提とせずに論考を進める．

[5] Sengupta［1959］などは，ヴィヴァラナ派について Padmapāda の *Pañcapādikā*（＝PP, 820 頃）に始まりそれに対する注 PPV により継承発展されたものと紹介する（Sengupta［1959］, pp. 269-272. Cf. Dasgupta［1991］）．このヴィヴァラナ派（Vivaraṇa school）という呼称がいつ頃から用いられるようになったのかは定かではないが，‘Vivaraṇānusārin’なるものたちの説が紹介されている 16c.頃成立の SLS（Cf. SLS, p. 17; 86）辺りに端を発するのではないかと思われる．

[6] 先行する研究を一部紹介すれば，Radhakrishnan［1999］な，どは māyā と avidyā の両者が区別されるのは後代であるとしており（Radhakrishnan［1999］，pp. 589-599.），実際にここで例として挙げられた後代の書 PD は māyā と avidyā とを別立てして論じている．また，Veezhinathan［1994］は，PD のように両原理を別立てするものとしては *Prakaṭārthavivaraṇa*（Anubhūti Svarūpa, 1270 頃）が挙げられ，*Nṛsiṃhottaratāpanīya-Upaniṣad* などの影響が考えられるとは指摘している．（Veezhinathan［1994］，pp. 76-79.）さらに，金倉［1932］，中村［1996］は，PD との関連が深いとされる *Vedāntasāra*（1500 頃）に見られる無知（ajñāna）を分析し，これに全体（samaṣṭi）と個別（vyaṣṭi）という二種が認められていることを指摘する．（金倉［1932］，pp. 293-354；中村［1996］，pp. 300-303.）

以上の諸研究は比較的後代の文献に関するものであるが，これ以外に例えばシャンカラにおけるこれらの術語の用法を分析するものも多数あり，諸見解に相違が見られる場合も

ある．Radhakrishnan［1999］は māyā と avidyā とを別立てするのは比較的後代であるとし，シャンカラにおいては māyā と avidyā とが無区別に用いられているとする．Radhakrishnan［1999］と同じくシャンカラは māyā と avidyā の両者を同一視していると主張する Thibaut［1904］に対して，Jacob［1925］はシャンカラは māyā という語を avidyā の同義語として用いることはないという結論に達している（Jacob［1925］，p. v.）．金倉［1932］もまたシャンカラにおいてすでに māyā と avidyā とが区別されうると分析している．シャンカラが māyā という場合には主宰神に関連しており，雑多な現実界が個人の主観的幻想であるという場合には māyā という語を用いることはないという結論を導いている．（同書，pp. 225-286.）また，Hacker［1950］は，シャンカラにおいて māyā あるいは avidyā が世界原因として述べられる際にのみ両者は同一視されると分析する．（Hacker［1950］，p. 275.）

さらに別の例を挙げれば，Cammann［1965］は PPV に見られる avidyā と ajñāna という術語に等しく‘Nichtwissen’という訳語を充てて論じている．おそらく，Cammann［1965］は avidyā と ajñāna を同一と考えてこのような方法を採用したのであろうが，このような方法が以上見てきたような見解の相違を生み出した原因の一つであると考えられる．

筆者は avidyā と ajñāna とを必ずしも同一であるとは考えないので，これらの術語に対して「無明」などといった訳語を充てずに，avidyā と ajñāna というように原語をそのまま用い，māyā，avidyā，ajñāna それぞれの固有のはたらきなどに注目したい．

[7] Hacker［1952］，p. 279.

[8] Ibid., pp. 279-280.

[9] Ibid., pp. 286-287.

[10] PPV, p. 204: trividhaṃ sattvam paramārthasattvaṃ brahmaṇaḥ arthakriyāsāmarthyasattvaṃ māyopādhikam ākāśādeḥ avidyopādhikasattvaṃ rajatāder iti ... //
PPV のこの箇所は SDS に引用され，実在に三段階を認める説の根拠とされている．（cf. SDS, p. 446.）

[11] VPS, p. 36. 20-23: evam tarhi trividhaṃ sattvam astu brahmaṇaḥ pāramārthikaṃ sattvam ākāśāder māyopādhikaṃ vyā(va)hārikaṃ sattvaṃ śuktirajatāder avidyopādhikaṃ prātibhāsikaṃ sattvam / tatrāpāramārthikasattvayor dvayor mithyātvam aviruddham / () 内は筆者補．
以上は，貝殻を銀であると見誤る場合に，以前に実在していると経験された銀が虚妄であるというのは矛盾ではないかという反論に対する VPS の応答である．

[12] このように実在に三層を認める説は，*Iṣṭasiddhi* には見られず，PPV などに至って確認され，その他 *Tattvapradīpikā*（＝TP, Citsukha, 1220 頃），*Vedāntaparibhāṣā*（Dharmarāja, 17c. 頃）などに見られるという．（Hacker［1952］，p. 286, 注記 17.）またこれら以外にも，*Dṛgdṛśyaviveka*（Śaṅkara?）に同様の説が見られる．（*Dṛgdṛśyaviveka*, 32-46.）

[13] VPS は arthakriyāsāmarthya を vyavahārika と言い換えたり，prātibhāsika という語を加えたりと PPV に紹介される三層を若干改変して紹介している．vyavahārika と prātibhāsika という分類がどこから始まるのかは明かではないが，少なくとも TP にこのような分類法を見ることができる．（TP, p. 83.）

[14] 中村［1984］は，シャンカラにおいて pāramārthika に対立するものとして引き合いに出された māyāmaya や vāsanāmaya が，後世の不二一元論派における prātibhāsika-satya に相当するものであるしているが，少なくとも PPV や VPS に挙げられる分類とはうまく対応しない．

[15] PD においても同じように三層からなる世界が見られる．māyā と結びついたブラフマンから虚空を始めとする五元素が生じるとし，これを主宰神による二元世界と述べる．この主宰神による二元世界に対して avidyā と結びついたブラフマンはさらに二様に世界を創り出す．これを個我による二元世界という．PD によれば，貝殻において銀を見るのは，個我による二元においてである．（Kato［2001］）

[16] PP, p. 20 : cf. Hacker［1950］，p. 276.
Mahādevan［1957］によれば，VPS は māyā と avidyā とを区別しないというヴィヴァラナ派の伝統に従っているとするが（Mahādevan［1957］，p. 229.），この「伝統」とは，おそらく PP の記述にもとづくものであろう．

[17] PPV, p. 207: atra kecid āhuḥ ato 'vidyāmayam iti vaktavyam na māyāmayam iti vibhramāṇāṃ tattvajñānanirākāryatayā 'vidyātmakatvāt māyā'vidyayor bhedāt / tathāhi svāśrayam avyāmohayantī kartur icchānuvartate na tathā 'vidyā / prasiddhaś ca māyā'vidyayor bhedo laukikānām / na hi māyāvinirmitahastyaśvarathādav avidyāśabdaṃ prayuñjata iti //

[18] VPS, p. 37. 1-5: nanu tattvajñānanivarttyatvād rajatam avidyāmayaṃ na tu māyāmayam / na ca māyaivāvidyā / lakṣaṇaprasiddhibhyāṃ tayor bhedāvagamāt / āśrayam avyāmohayantī kartur icchām anusarantī māyā tadviparītā tv avidyā / loke hi māyānirmitahastyaśvarathādau māyāśabda eva prasiddho nāvidyāśabda iti /

[19] PPV, pp. 207-208: ucyate lakṣaṇabhedāt lokavyavahārasāmarthyād vā tayor bhedaḥ kathyate / na tāval lakṣaṇabhedāt anirvacanīyatayā tattvāvabhāsapratibandhaviparyayāvabhāsalakṣaṇasyāviśeṣāt /
VPS, p. 37. 5-6: ucyate / anirvacanīyatve sati tattvāvabhāsapratibandhaviparyayāvabhāsayor hetutvaṃ lakṣaṇaṃ tac cobhayor aviśiṣṭam /
以上の反論と応答に類似したやりとりが SDS に見られる．VPS と同様，SDS において反論者は，māyā と avidyā とが別のものであるということの根拠として，それ自身の拠り所を迷わせるか否かを挙げる．またその反論に応答して，māyā と avidyā とが同じであるということの根拠として，言い表され得ないこと，真実の現れの障碍となることなどを挙げて

いる．(SDS, p. 447.)

[20] PPV, pp. 208-9; VPS, p.37. 5-21.

[21] PPV, p. 211: tasmāl lakṣaṇaikyād vṛddhavyavahāre caikatvād ekasminn api vastuni vikṣepapradhānyena māyā ācchādanaprādhānyenāvidyeti vyavahārabhedaḥ / icchādhīnatvatadvaiparītyena vā vyavahārabheda iti yuktam māyāmayam iti //

[22] VPS, p. 38. 3-6: iti smṛtau māyā'vidyayor mukhata evaikatvanirdeśāt / lokaprasiddhas tv ekasminn api vastuny upādhibhedād upapadyate / virūpajanakatvākāreṇecchādhīnatvākāreṇa vā māyeti vyavahāraḥ / āvaraṇākāreṇa svātantryākāreṇa vā 'vidyeti vyavahāraḥ / tasmād rajatasya māyāmayatvam upapannam /

[23] PPV, p. 89: nanu kathaṃ mithyā'jñānam adhyāsasyopādānam tasmin saty adhyāsasyodayād asati cānudayād iti brūmaḥ /

[24] VPS, p. 14. 26-7: tasya cādhyāsasyānādyanirvacanīyabhāvarūpājñānam upādānam / tasmin saty adhyāsodayād asati cānudayāt /

[25] Thibaut [1994] の訳語 'a positive entity' を参考にした．

[26] VPS, p. 21.

[27] VPS, p. 23. 22-24: tad evaṃ bhāvarūpājñānam anātmānam anāvṛtyaiva tatra vikṣepamātraṃ janayati ātmānaṃ tv āvṛtya tatrāham idaṃ mamedaṃ ity evaṃvyavahārayogyān adhyāsān api janayati // Cf. PPV, p. 104-108.

（参考文献）

金倉　圓照　[1932]『吠檀多哲學の研究』，岩波書店，東京．

中村　元　[1984] シャンカラにおける真実と非真実，『竹中信常博士頌寿記念論文集宗教文化の諸相』，pp. 647-57, 山喜房佛書林，東京．

[1996]『ヴェーダーンタ思想の展開』，中村元選集［決定版］第 27 巻，春秋社，東京．

Cammann, K. [1965] *Das System des Advaita nach der Lehre Prakāśātmans*, Münchener Indologische Studien Band 4, Otto Harrassowitz, Wiesbaden.

Dasgupta, S. [1991] *A History of Indian Philosoph*, vol. II, rpt. [First ed. 1922], Motilal Benarsidass.

Hacker, P. [1950] Eigentümlichkeiten der Lehre und Terminologie Śaṅkaras, Avidyā, Namarūpa, Māyā, Īśvara, *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Sprechen* 100, S. 246-286.

[1952] Die Lehre von den Realitätsgraden im Advaita-Vedānta, *Zeitschrift für Missionswissenschaft und Religionswissenschaft* 36, S. 277-293.

Jacob, G.A. [1925] *The Vedāntasāra*, edited with Notes and Indices by Colonel G.A. Jacob, 4th ed. [1st ed. : 1894], Nirnayasagar Press, Bombay.

Kato, T. [2001] Māyā and Avidyā in the Pañcadaśī, 『印仏研』 49-2, pp.28-30.

Mahadevan, T.M.P. [1957] *The Philosophy of Advaita with Special Reference to Bhāratītīrtha-Vidyāraṇya*, Revised Edition [First Edition : 1938], Ganesh & Co. Private ltd., Madras.

Radhakrishnan, S. [1999] *Indian Philosophy*, Oxford India Paperbacks, [First Edition : 1923] , Oxford Univ. Press.

Sengupta, K. [1959] *A critique on the Vivaraṇa School : Studies in some fundamental Advaitist Theories*, Firma K. L. Mukhopadhyay, Calcutta.

Suryanarayana, S. [1941] *The Vivaraṇaprameyasaṅgraha of Bhāratītīrtha*, translated into English by S.S. Suryanarayana Sastri and Saileswar Sen, Andhra University Series No.24, Sri Vidya Press, Kumbakonam.

Thibaut, G. [1994] *The Vivaraṇaprameyasaṃgraha of Vidyāraṇya : A Summary of the Topics of the Elucidation*, Translated by G.Thibaut, Second Edition, [First Edition : Allahabad, 1915], Sri Satguru Publications, Delhi.

Veezhinathan, N. [1994] The Concept of Māyā-Avidyā. *The Tradition of Advaita*, edited by R.Balasubramanian, pp. 73-86, Munshiram Manoharal Publishers Ptv.Ltd., New Delhi.

2001.3.22 稿

かとう　たかひろ　東京大学大学院博士課程

Māyā, *Avidyā* and *Ajñāna* in the Vivaraṇa School

KATO, Takahiro

In the Advaita-Vedānta, it is repeatedly emphasized that *Ātman* is one and the same with *brahman*, which is the only one without a second, and that right knowledge of their identity brings us final emancipation. The most important point for followers of this school is how to obtain this knowledge. At the same time, other important issues for them are questions such as from where this multiple world could have arisen, how it is compatible with only one *brahman*, and why it conceals the true *brahman* from us.

In the *Pañcapādikāvivaraṇa* (=PPV) and its summary *Vivaraṇaprameyasaṃgraha* (=VPS), which established the Vivaraṇa school in the later Advaita-Vedānta, it is stated that this multiplicity of the world is brought about by *māyā*, *avidyā* or *ajñāna*. In the Advaita, opinions vary as to whether *māyā*, *avidyā*, *ajñāna* etc., are identical or not. This is also the case in the Vivaraṇa school. This paper is intended as an examination of the relationship between the multiple world and these concepts by discussing the question of whether in the Vivaraṇa school they are identical or not.

As Hacker [1952] has already pointed out, some followers of the later Advaita attribute to this world a certain degree of reality which can be classified into three series. The PPV and the VPS adopt the series which admits three levels of reality, i.e. *paramārthasat*, which corresponds to *brahman*; *vyāvahārikasat*, which corresponds to *brahman* associated with *māyā*; and *prātibhāsikasat*, which corresponds to *brahman* with *avidyā*. In this case, *māyā* and *avidyā* are regarded as two different conditioning adjuncts, the former of which falsely projects the various forms on the one *brahman* and the latter of which merely conceals the true *brahman*.

On the other hand, the PPV and the VPS presuppose two levels of reality also shown by Hacker [1952], i.e. *satya*, which corresponds to *brahman*, and *asatya*, which corresponds to everything other than *brahman*. In this case, what brings us the diversity of the *asatya* world is *ajñāna* with a positive entity that causes the superimposition.

Further, it is explained in the VPS that *ajñāna* has two functions. One is projection and the other is concealment. This fact makes it possible to suppose that these two functions of *ajñāna* are comparable to those of *māyā* and *avidyā*.

The inconsistency in both the PPV and the VPS, which adopt two levels of reality while accepting three levels, is resolved by two points of view. According to the *Smṛti*, there is no difference between *māyā* and *avidyā*, which results in two levels of reality. According to our daily experiences, *māyā* and *avidyā* are clearly different, and this fact results in the three levels. Thus, at least in the PPV and the VPS, *māyā*-like *ajñāna* and *avidyā*-like *ajñāna* can also be meant by the

term *ajñāna* and at the same time three levels of reality could be implied by it.

The difference in standpoint as to whether they accept two or three levels of reality is caused by the difference in standpoint as to whether they accept either that the false world other than *brahman* only exists in each person or that the world falsely exists beyond each person. When both the PPV and the VPS refer to the three levels of reality or to *māyā*-like *ajñāna* and *avidyā*-like *ajñāna,* they imply the difference between these two worlds.